

2024 年春 初開催！

青森県内 5 つの美術館・アートセンターによるアートフェス
AOMORI GOKAN アートフェス 2024
「つらなりのはらっぱ」

AOMORI GOKAN Arts Fest 2024 「Interweavers in Open Fields」

2024 年 4 月 13 日(土) — 9 月 1 日(日)

5 館共通企画 決定! 栗林隆 《元気炉》

周遊チケット 3,700 円 (税込) 販売開始 2 月 14 日

青森県の 5 つの美術館・アートセンター(青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館)では、2024 年 4 月 13 日(土)から 9 月 1 日(日)まで「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」を開催します。この度、本アートフェスの [共通企画] として、美術家・栗林隆による体験型のインスタレーション作品である《元気炉》が、5 館を巡回することが決定しました。栗林は、国際美術展や各地の芸術祭など、世界を舞台に作品を発表するアーティストで、自然と人間、社会をとりまく様々な「境界」をテーマに作品を制作してきました。本アートフェスのテーマである「つらなりのはらっぱ」を体現するように、5 館をつなぐ作品をお楽しみいただけます。

また 5 館が開催するフェスの [メイン企画] が鑑賞できる、公式ガイドブック付きの周遊チケットを 2024 年 2 月 14 日 (水) より、専用サイトで販売します (オンライン販売のみ)。ガイドブックには 5 館全てに来館するとオリジナルグッズがあたるスタンプラリーや、フェスと同時期に開催する展覧会や公式フェスサポーターのショップ、施設で特典が受けられるパスポートが一体になっており、アート鑑賞にも周遊にもお得なチケットです。

本フェスでは、「つらなりのはらっぱ」という共通テーマで各美術館・アートセンターが企画する [メイン企画]、並びに 5 館を巡回する [共通企画] などのアート体験を中心に地域と連携し、県内各地域にある自然や食、建築など豊かな文化に触れながら、青森の魅力を再発見していただくことを目指します。

[共通企画] 5館での巡回展示 決定！**栗林隆 《元気炉》**

【参考図版】 栗林隆 《元気炉》2022年 《蚊帳の外》ドクメンタ15、ドイツ・カッセル）より Photo : Rai Shizuno

本アートフェス後半の8月から最終日にかけて、栗林隆による《元気炉》が開催館を巡回します。栗林隆は、空間の内と外、自然と人間、人間同士の間にある境界など、あらゆる時代や場所に存在する「境界」に目を向けて、その意味を問い直すような作品を制作してきた作家です。《元気炉》は、原子炉の形状をした構造物に薬草の香りを帯びた蒸気を発生させて、観客が中に入って体験することが可能な作品です。本作は、作家がかつてタイに赴いた折、その土地で採取されるハーブを用いたスチームサウナによって、体調不良だった体にエネルギーを取り戻したという経験に由来します。ここには、2011年の東日本大震災後に再認識した原発事故の恐ろしさと、持続性の高い自然エネルギーや再生可能な社会に向けた提案とを重ね合わせた構造となっています。原子炉を模した作品の内部空間や周囲に人々が集い、植物のエネルギーを感じることでできる本作は、人と自然の境界線上に生まれた場所であり、それは本アートフェスのテーマである「つらなりのはらっぱ」を体現するように、ここに集った人々が、みえざる境界線をまたいで、世界との新たな関係性を構築する機会を生み出そうとするものです。

| 展示スケジュール (予定)

* 作品が稼働する日時の詳細は、公式WEBサイトで後日発表します。

8月9日(金) - 8月11日(日)	青森県立美術館
8月14日(水) - 8月15日(木)	青森公立大学 国際芸術センター青森
8月18日(日)、19日(月)、21日(水)	八戸市美術館
8月24日(土)、25日(日)	十和田市現代美術館
8月28日(水) - 9月1日(日)	弘前れんが倉庫美術館

| 栗林隆 プロフィール

Photo : Rai Shizuno

1968年、長崎県出身。東西統合から間もない1992年よりドイツに滞在、その頃より「境界」をテーマにドローイング、インスタレーション、映像など多様なメディアを使いながら作品を発表。現在は日本とインドネシアを往復しながら国際的に活動する。主な展覧会に、2022年、ドクメンタ15(Cinema Caravan and Takashi Kuribayashiとして)、カッセル、ドイツ。2019年、瀬戸内国際芸術祭2019「伊吹の樹」、伊吹島、香川。2018年「バレ・ド・トーキョー Enfance/こども時代」展、バレ・ド・トーキョー、パリ、フランス。2012年、個展「Water > Wasser」十和田市現代美術館、青森など。

－5 館をお得に！楽しく巡る！

●周遊チケット

オンライン販売のみ（電子チケット） 数量限定！

公式ガイドブック付き 5 館周遊チケット

一般 | 3,700 円 (税込)

会期中、5つの美術館・アートセンターで開催する本フェスの [メイン企画] を鑑賞できる、公式ガイドブック付き周遊チケットです。各館で個別に観覧券を購入するより 1,800 円お得になります。さらに公式ガイドブックには「スタンプラリー&パスポート」が一体になっており、「スタンプラリー」は 5 館全てを周遊するとオリジナルグッズが抽選で当たります。一方「パスポート」は、フェスの会期中に 5 館で開催する他の展覧会や美術館周辺の公式フェスサポーターのショップ、施設での割引やサービスなどの特典が受けられます。

2024 年 2 月 14 日（水）よりオンライン限定で販売します。

- 販売開始 2024 年 2 月 14 日（水）12:00
*購入にあたり事前に「ArtSticker」への登録が必要です
*販売予定数量に達し次第終了となります
- 有効期間 2024 年 4 月 13 日（土）－ 9 月 1 日（日）
*各館の [メイン企画] の会期は異なります。詳細は公式 WEB サイトに記載しております
- 購入方法 オンラインのみ
▶専用サイトから (ArtSticker)
https://artsticker.page.link/AOMORIGOKAN_ArtsFest24
- 
- 専用サイト
- 備考
- 5 会場それぞれ 1 回のみ使用可能な周遊チケットです。
 - ご利用はフェス開催期間中（2024 年 4/13－9/1）有効です。
 - 一般（大人）のみの販売です。小学生未満は大人同伴に限り入場無料です。
 - 販売はオンラインのみです。各館での販売はありません。
 - 定数になり次第、販売終了となります。
 - 最初に入館される施設の受付で「公式ガイドブック」をお渡しします。

●公式ガイドブック

▼公式ガイドブック 1,300円(税込) 3月13日(水)販売開始
スタンプラリー&パスポート付き!!

各館で開催する展覧会や施設情報に加え、5館が位置する各市のエリア情報、周辺の観光、グルメスポット、さらには周遊のモデルコースなど充実した内容のガイドブックです。青森県外からの行き方に加え、県内を移動するアクセス情報も分かりやすくまとめました。2024年3月13日(水)各館のミュージアムショップ(青森公立大学 国際芸術センター青森をのぞく)、青森県内の書店で販売します。

販売先： 各館のミュージアムショップ、青森県内の書店
体裁： A5判型/全108ページ/フルカラー
発行： 有限会社グラフ青森

公式ガイドブック特典
「スタンプラリー&パスポート」

ガイドブックと一体になった「スタンプラリー&パスポート」で、美術館や公式フェスサポーターのショップ、施設で提示すると様々な割引やサービスが受けられます。

○有効期間 2024年4月13日(土)～9月1日(日)

- 特典1 **美術館で同時期に開催する展覧会の観覧料を割引**
フェスの会期中に5館で開催する[同時開催]の観覧料が割引になります。20名様まで有効。*フェス期間中、各美術館で1日限り有効
- 特典2 **フェスサポーターのショップ、施設で割引やサービスなどの特典**
本パスポートを提示いただくと様々な割引やサービスが受けられます。特典が受けられる時期や内容・条件は異なります。詳細は公式WEBサイトをご覧ください。
- 特典3 **抽選でオリジナルグッズをプレゼント**
会期中、本フェスの[メイン企画]を鑑賞し、5つのスタンプを集めた方には抽選でオリジナルグッズを差し上げます。
・応募方法 各館の応募箱または事務局への郵送
・後日厳正なる抽選の上、当選者へ商品を発送します



● 周遊モデルコース

本フェスは、美術館巡りとあわせて、青森県の豊かな自然、伝統文化を体験いただくこともコンセプトの中心となっており、ガイドブックを中心に周遊モデルコースを提案しています。公共交通機関で巡るコースや「自然」「工芸」をテーマにしたコースなど、詳細はガイドブックのほか、公式WEBサイトでも紹介します。さらに展示のテーマをより深く楽しんでいただくため、周辺の文化施設や自然を巡る鑑賞ツアー、学芸員によるガイドなどを実施予定です。詳細は公式WEBサイトで更新していきます。

●公共交通機関と徒歩で周遊 1dayプラン（青森市、弘前市、八戸市、十和田市）

バスなどの公共交通機関や徒歩のみで巡るモデルコースです。各館がある青森市、弘前市、八戸市、十和田市の4つのエリア別に1日で周遊できるプランを紹介しています。

●ほぼ公共交通機関で5館をめぐる「アート×ご当地グルメ」 2泊3日プラン

●公共交通機関と徒歩でめぐる「アート×自然」八戸～十和田 2泊3日プラン

青森県には東北地方の脊梁として中央に八甲田山を代表とする奥羽山脈が位置し、日本海側と太平洋側では自然や歴史、食文化などが異なります。モデルコースでは美術館を中心に周辺の食や自然を体験できる周遊や5館全てをほぼ公共交通機関を使って巡るプランを案内しています。

●車でめぐる「アート×工芸体験」弘前～青森 2泊3日プラン

青森県には地域の生活の中で生まれ、育まれた塗物や織物などの伝統工芸品が多数あります。こちらのモデルコースではそれらの体験を含む周遊プランを提案しています。

●青森県内を周遊する貸切日帰りバスを運行 毎月実施

フェスの会期中、5館と各地域にある自然や食、建築など豊かな文化に触れる日帰りバスツアーを毎月実施します。初回はオープニングにあわせ、4/13（土）と4/14（日）に実施します。詳細は公式WEBサイトでご案内します。旅行企画実施：（株）また旅くらぶ

<2024年4月>

●4月13日（土）「アート×桜」青森⇄弘前 参加費：1名12,000円（税込）

青森駅→新青森駅→青森県立美術館→青森公立大学 国際芸術センター青森→ふじさき食彩テラス→桜並木→弘前れんが倉庫美術館→弘前城（桜）→新青森駅→青森駅

●4月14日（日）「アート×桜」八戸⇄十和田 参加費：1名10,000円（税込）

八戸駅→八戸市美術館→道の駅とわだ→農園カフェ日々木→十和田市現代美術館→アート広場→十和田市官庁街（桜）→八戸駅

<2024年5月>

●5月2日（木）「アート×りんごの花」八戸⇄弘前 参加費：1名13,000円（税込）

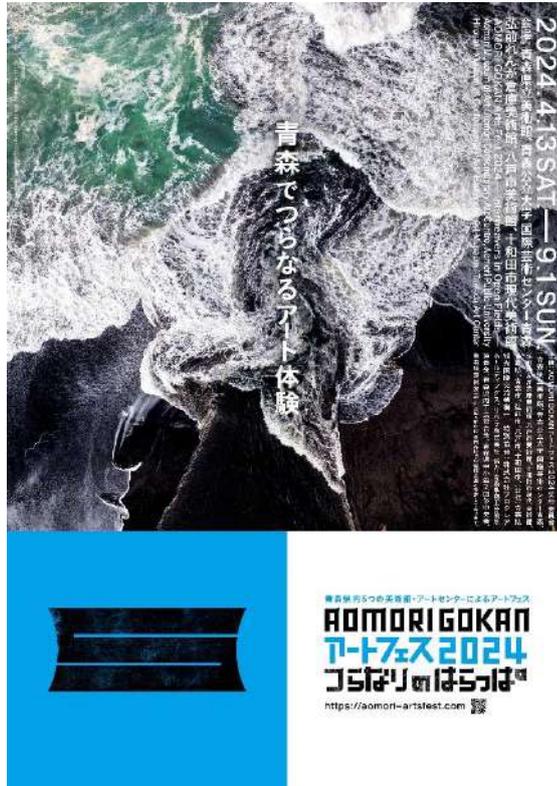
●5月8日（水）「アート×菜の花・つつじ」弘前⇄青森 参加費：1名25,000円（税込）

また旅くらぶ



—ポスター— チラシ

●ポスター



●チラシ



デザイン | 野間真吾 <アートディレクター/デザイナー>

大阪府生まれ。ロンドン芸術大学 (London College of Communication MA Graphic Design) 修士課程卒。国内外のデザイン会社を経たのち、2008年株式会社佐藤卓デザイン事務所入社。2017年にデザインオフィス NOMA Inc.設立。ISSEY MIYAKE KYOTO | KURA のアートディレクターを務める。東京 ADC 賞 2020—2021、JAGDA 賞 2020、東京 ADC 賞 2019 など受賞。2022 毎日デザイン賞ノミネート、Dezeen Award 2020 (Interior Large Retail 部門) Short listed。

AOMORI GOKAN アートフェス 2024 実行委員会
事務局 (青森県立美術館内)
担当: みのしま まくらば
TEL 017-783-3000 E-MAIL bijutsukan@pref.aomori.lg.jp

AOMORI GOKAN アートフェス 2024
広報事務局 (エヌ・アンド・エー株式会社内)
担当: 鎌倉、永倉 TEL 03-6261-5784
E-MAIL aomoriart-gokan@nanjo.com

ー公式 WEB サイト

<https://aomori-artsfest.com>

公式 WEB サイトは、会期中に開催する各館の展覧会やイベント、周遊モデルコースのほか、施設周辺の公式フェスサポーターのショップ、施設の情報や特典内容を随時公開します。青森県外からのアクセスとあわせ、5つの美術館、アートセンターを移動する際、参考にさせていただけるロードマップなど、はじめての青森を訪れる方にも便利で役に立つ機能が充実しています。



▼エリア紹介



▼各館 ページ



▼周遊モデルコース



▼アクセス



開催概要

タイトル (日)	AOMORI GOKAN アートフェス 2024 「つらなりのはらっぱ」	
タイトル (英)	AOMORI GOKAN Arts Fest 2024 「Interweavers in Open Fields」	
会期	2024年4月13日(土) - 9月1日(日)	
主催	AOMORI GOKAN アートフェス 2024 実行委員会 [青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館、青森県、青森市、弘前市、八戸市、十和田市、(公社) 青森県観光国際交流機構]	
実行委員長	青森県立美術館 館長 杉本康雄	
特別協賛	(株) プロクレアホールディングス リベラ (株)	
協賛	青森県信用金庫協会 (株)角弘 (株)三和堂 津軽海峡フェリー(株) 東和電材(株) 青森朝日放送(株) (株)青森テレビ 青森放送(株) 青森三菱電機機器販売(株) 青森三菱ふそう自動車販売(株) (株)あさひほうむ (株)オプティム (株)デーリー東北新聞社 青森県商工会議所連合会 (一社) 慈恵会 (株)城ヶ倉観光 NEXCO 東日本 倉橋建設(株) (株)トロンマネージメント	富士見総業(株) 紅屋商事(株) (株)マエダ (株)吉田産業 (株)東奥日報社 八戸酒造(株) (株)日立製作所東北支社 丸大堀内(株) 三八五流通グループ (株)陸奥新報社 (株)ラグノオささき (株)リンクステーション 藤村機器(株) プライフーズ(株) (株)丸大サクラキ薬局 南部電機(株)
企画	・ 青森県立美術館 ・ 青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC] ・ 弘前れんが倉庫美術館 ・ 八戸市美術館 ・ 十和田市現代美術館	池田亨、工藤健志、菅野晶、板倉容子、高橋しげみ、奥脇嵩大 慶野結香 木村絵理子、佐々木蓉子、宮本ふみ 平井真里、大澤苑美、高橋麻衣 外山有菜
公式WEBサイト	https://aomori-artsfest.com	
SNS	・ X (旧 Twitter) @aomori_artsfest ・ Instagram @aomori_artsfest ・ facebook @aomori_artsfest ・ ハッシュタグ #青森アートフェス #aomori_artsfes	

—AOMORI GOKAN アートフェス 2024 展示構成

1. [メイン企画] 共通テーマ「つらなりのはらっぱ」のもと各館で開催する展覧会
2. [共通企画] 5館を巡回する共通作品の展示
3. [同時開催] 本フェスの期間中に開催される展覧会

1 [メイン企画]

- ・青森県立美術館 「かさなりとまじわり」
前期：2024年4月13日（土）－6月23日（日）
後期：2024年7月6日（土）－9月29日（日）
- ・青森公立大学 国際芸術センター青森 「currents / undercurrents -いま、めくるめく流れは出会って」
前期：2024年4月13日（土）－6月30日（日）
後期：2024年7月13日（土）－9月29日（日）
- ・弘前れんが倉庫美術館 「^{はかな} ^{きら} 蜷川実花展 with EiM: 儚くも煌めく境界 Where Humanity Meets Nature」
「弘前エクステンジ#06 『^{しらかみのぞきみこう}白神観見考』」
2024年4月6日（土）－9月1日（日）
- ・八戸市美術館 「エンジョイ！アートファーム !!」
2024年4月13日（土）－9月1日（日）
- ・十和田市現代美術館 「野良になる」
2024年4月13日（土）－11月17日（日）

2 [共通企画]

栗林隆 《元気炉》

展示スケジュール（予定） * 作品が稼働する日時の詳細は、公式WEBサイトで後日発表します。

8月9日（金）－8月11日（日）	青森県立美術館
8月14日（水）－8月15日（木）	青森公立大学 国際芸術センター青森
8月18日（日）、19日（月）、21日（水）	八戸市美術館
8月24日（土）、25日（日）	十和田市現代美術館
8月28日（水）－9月1日（日）	弘前れんが倉庫美術館

3 [同時開催]

- ・青森県立美術館 「帝国ホテル二代目日本館 100周年 フランク・ロイド・ライト 世界を結ぶ建築」
2024年3月20日（水・祝）－5月12日（日）
「瀧池朋子展：メディスン・インフラ」 2024年7月13日（土）－9月29日（日）
- ・八戸市美術館 「展示室の冒険」 2024年4月20日（土）－6月24日（月）
「tupera tupera のかおてん。」 2024年7月6日（土）－9月1日（日）
「コレクションラボ 007 大久保景造と八戸文化」 2024年3月23日（土）－7月8日（月）
「コレクションラボ 008 彩る書」 2024年7月13日（土）－10月28日（月）
- ・十和田市現代美術館 「尾角典子展」 2024年7月6日（土）－9月8日（日）

ー その他の開催企画

| オープニング セレモニーの開催（青森県立美術館）

2024年4月12日（金）

開幕前日の4月12日（金）、青森県立美術館にてプレス、関係者向けの「オープニング セレモニー」を開催予定です。当日は本フェスの展覧会に参加されるアーティストや関係者の登壇を予定しています。

- ・会場 青森県立美術館
- ・オープニング セレモニー 15:00～
- ・内覧会

| 開催館におけるプレストアアの開催

2024年4月12日（金）、13日（土）

開幕前日の4月12日（金）、並びに4月13日（土）の2日間にわたり、開催館においてプレス内覧会を開催します。当日は本フェスの「メイン企画」を中心に、各館・アートセンターの展示内容をご取材いただけます。開催スケジュールの詳細は別途、ご案内します。

ー 詳細は後日、ご担当者にご案内をいたしますー

AOMORI GOKAN アートフェス 2024 [メイン企画] / [共通企画] 広報画像申請書

2024年4月13日（土）－ 9月1日（日）

■ 貴社についてお知らせください

○媒体名

○貴社名

○ご担当者名

様

○所属部署

○ご住所〒

○E-mail

○TEL番号

○FAX番号

○ご掲載・放映の予定日が決まっておりますお知らせください

月

日

< 広報画像、取り扱いに関するお願い >

- 作品画像の使用はAOMORI GOKAN アートフェス 2024をご紹介いただく場合のみとし、閉幕後の使用はできません。
- 作品画像をご紹介いただく場合は、展示美術館名、指定のキャプションを必ずご記載してください。
- 全図で使用してください。トリミング、変形、部分使用、文字のせは禁止となっております。
- 掲載記事・番組内容については、基本情報確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で広報事務局までFAX又はメールにてお知らせください。
- ご掲載頂いた場合は、お手数ですが、掲載紙（誌）または同録を広報事務局までお送りください。

▼ 希望される広報画像の番号に「○」をつけてください。

A AOMORI GOKAN アートフェス 2024 ポスター画像

B AOMORI GOKAN アートフェス 2024 [共通企画]

栗林隆 《元気炉》2022年（《蚊帳の外》ドクメンタ15、ドイツ・カッセル）より Photo : Rai Shizuno

1 青森県立美術館 外観

1-1 参考図版 吉田克朗 《work 9》1970年 ユミコチバアソシエイツ蔵

1-2 参考図版 原口典之 《F-8E CRUSADER》（「十字路-CROSSROAD」ART BASE 百島広島での展示風景）
2014年 ©ART BASE MOMOSHIMA

2 青森公立大学 国際芸術センター青森 外観

2-1 岩根愛 《The Opening》2022年

2-2 青野文昭 《ここにいないものたちのための群像 - 何処から来て何処へ行くのか - サイノカワラ 2016》2014-2016年

3 弘前れんが倉庫美術館 外観 ©Naoya Hatakeyama

3-1 蜷川実花 《花、瞬く光》2022年 ©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

3-2 参考図版 狩野哲郎 《21の特別な要求》2021年 Courtesy of the artist

4 八戸市美術館 外観 ©Daici Ano

4-1 5人のアーティストたち（左から磯島、東方、漆畑、しばやまいぬ、蜂屋）

4-2 参考図版 東方悠平 《TENGUBUCKS Cafe in Hue - Coffee Float》2019年

5 十和田市現代美術館 外観

5-1 参考図版 丹羽海子 《Metropolis Series: Good Egg Community》2022年 Courtesy the artist and Someday, New York Photo : Daniel Terna

5-2 参考図版 アナイス・カレニン 《リコマベ》2022年 Photo : 竹久直樹



青森県内5つの美術館・アートセンターによるアートフェス

AOMORI GOKAN アートフェス 2024

「つらなりのはらっぱ」

2024年4月13日(土) — 9月1日(日)

2024年度のテーマ「つらなりのはらっぱ」について

「はらっぱ」と聞いて思い浮かべる風景は人それぞれ違うように、青森には「はらっぱ」にたとえられる、個性豊かな5つの現代美術を扱う館が揃っています。「はらっぱ」は目的をもって行くところではなく、訪れることでなにかに会い、なにかが起る、特別だけれど日常とも地続きの場所です。そこは、訪れては去っていく人間、動物、植物などの訪問者たちが関係する境界上に位置し、日々思い思いの活動が繰り返される場とも言えます。本テーマには、5つの美術館やアートセンターがまさに「はらっぱ」のように機能し、それぞれの個性的な活動のつらなりから新たな関係性が紡がれていくようにとの思いが込められています。5館それぞれの「つらなりのはらっぱ」を通して、これまでにない風景がいま、ここに立ち上がることを目指します。

本アートフェスの特徴

■新しい文化芸術ネットワークの在り方を探る

本アートフェスではディレクターを置かず、5館の学芸員が集まって議論を重ね、コンセプトやテーマを練りあげていきました。これは新しい文化芸術ネットワークの在り方を探り、青森県の文化的多様性とその魅力を伝えていく試みとなります。

■5館の個性を接続させることで浮かび上がる「つらなりのはらっぱ」というテーマ

5館は青森市、弘前市、八戸市、十和田市にそれぞれ点在しています。文化圏や都市機能の異なる地域で、5つの館もそれぞれ個性的な活動を行っています。プロジェクトによって各館がゆるやかにつながり、その効果を県全域に波及させていくことを目指した「芸術文化体験+観光」プロジェクトです。今年度のテーマ「つらなりのはらっぱ」のもと、5館の特徴を活かした展覧会、また共通企画として栗林隆《元気炉》が各館を巡回します。

■子どもたちが楽しく、アートに触れられる5館共通の鑑賞ツール

アートフェスをより深く楽しむため、子どもや親子を対象とした鑑賞ツールを用意します。5館に親しむための情報や作品鑑賞のコツなどアート体験の入口となるコンテンツのほか、各館の展示やプロジェクトに関するワークシートを制作予定です。※2024年7月完成予定

■青森県内の多彩な魅力を5つの美術館、アートセンターを軸に体験する周遊プラン

本州最北端に位置し、三方を海に囲まれた青森県は地域により気候や風土が異なり多彩な伝統、自然、食文化に恵まれています。アートフェスでは、その魅力を再発見してもらうことを目的に、工芸、建築、自然などをテーマに設定し、国内外、また県民や近隣の方にも新しいアートを通じた体験を提案します。

[メイン企画] 青森県立美術館

かさなりとまじわり

- 会期 前期：2024年4月13日（土）－6月23日（日）
後期：2024年7月6日（土）－9月29日（日）
- 会場 青森県立美術館 地下1階展示室、コミュニティギャラリー、ワークショップエリア、屋外ヤード
- 開館時間 9:30～17:00（入館は16:30まで）
- 休み 第2・第4月曜日および5/14（火）、15（水）、6/24（月）～7/5（金）
- 参加作家 原口典之 | 吉田克朗、吉田槲子 | 青木 淳 | 井田大介 | 大森裕美子、大森記詩、吉田有紀、
青秀祐 | Viirtualion ほか



左) 参考図版 吉田克朗 《work 9》 1970年 ユミコチバアソシエイツ蔵



右) 参考図版 原口典之 《F-8E CRUSADER》（「十字路口-CROSSROAD」ART BASE 百島広島での展示風景）
2014年 ©ART BASE MOMOSHIMA

青森県立美術館を設計した青木淳氏が提唱した「原っぱ」論を援用し、展示室のみならず、コミュニティギャラリーやワークショップエリア、屋外ヤードなども展示やプロジェクトに活用します。展示室を含めた諸室をそれぞれの「原っぱ」に見立て、館内外の至るところでアートを発見、鑑賞、体験できる場を設けることで、美術館全体に大きな「つらなり」を生み出していきます。「展示室で展覧会を見て、ショップやカフェに立ち寄って帰る」だけでなく、県立美術館というひとつの街を自由に散策しながら、建築×アートの魅力を美術館全体から体感いただけます。

テーマは「かさなりとまじわり」。美術館を構成する特徴的な各空間が「かさなり」、いくつかのコンセプトに沿って作品がインストールされることで、青森の自然と人間の「まじわり」、死んだものと生きているものの「まじわり」、現代社会のありようとこれから未来を切り拓いていく人たちとの「まじわり」の諸相を浮かび上がらせていきます。

三内丸山遺跡に着想を得た美術館の施設内外を往還しながら、縄文からつらなる長い時間の中で堆積してきた青森の文化芸術のエネルギーを引き出し、豊かな青い森の生態系のように展示空間を連鎖、循環させることで、未来を切り開くための新しい活力を美術館全体に充満させる試みです。尚、アートフェスの開幕を記念し、5館の企画展・プロジェクトの参加アーティストによるクロストークを開催します。

（2024年4月14日（日）14:00-16:00 県立美術館シアターにて）

[メイン企画] 青森公立大学 国際芸術センター青森

currents / undercurrents
 -いま、めくるめく流れは出会って

会期 前期：2024年4月13日（土）－6月30日（日）
 後期：2024年7月13日（土）－9月29日（日）
 会場 国際芸術センター青森 ギャラリーA・B
 開館時間 10:00～18:00
 休み 会期中は休み無し
 参加作家 青野文昭、Jumana Emil Abboud（ジュマナ・エミル・アブード）、岩根愛、是恒さくら、工藤省治、光岡幸一、中嶋幸治、澤田教一、鈴木正治、Jasmine Togo-Brisby（ジャスミン・トーゴ＝ブリスビー）、Robin White（ロビン・ホワイト）、[後期のみ] アイヌの衣服（青森市教育委員会所蔵）
 会場構成 山川陸



岩根愛 《The Opening》 2022年

本展では、「現在」という意味をもちながら、海流や気流をはじめとして、ある一定の方向に動く水や空気、電流などの変わり続ける流れを示す「current」と、表面や他の流れの下にある目に見え難い流れや暗示を意味する「undercurrent」をキーワードとして、ある場所とかかわり合いながら表現をつむぎ出す国内外のアーティスト、そして青森ゆかりの表現者たちによる作品が集まります。前期と後期の出展作家は同じですが、会期半ばで展示替えをし、異なる2つの展示会を行うことで、一回限りでない場所への働きかけや、変化し続ける「いま」をこの場に取り込むことを試みます。それぞれの表現が発生させる流れや渦のようなものが、出会い交差することで、また新たな流れや渦を無数に生成させていく…実験的なアプローチを通して、私たちの現在地を問う企画です。

国際芸術センター青森は、表現活動を行う人々が全世界から集い、宿泊しながら地域住民や学生らと交流し、滞在制作を行うアートセンターです。

表現者たちは偶然や必然に導かれながら移動し、この青森という土地／場所へやってきます。古代からヒトをはじめとした生き物は、自然の力も借りながら、移動を続けることで生きてきました。生まれた場所、定住する場所、前にいた場所、そしてこれから行く場所は、今たまたま現在地であるここ青森と、どのようにかかわり合うのでしょうか。そして、様々な場所の自然や人間、非人間たちといった存在、そして歴史や記憶と私たちは、いかに交差しつつ、語り合い、とらえ直しながら生きていくことが可能なのでしょうか。



青野文昭 《ここにいないものたちのための群像 - 何処から来て何処へ行くのか - サイノカワラ 2016》 2014 - 2016年

野外彫刻 |

青森公立大学 国際芸術センター青森の敷地内には野外作品が点在しています。野外彫刻作品、アーティストインレジデンスで制作されその後、展示される作品が混在しています。自然豊かな森の散策と共に国内外の作家による作品を鑑賞いただけます。



河口龍夫 《関係-時の杖》 2023

[メイン企画] 弘前れんが倉庫美術館

- はかな きら
① 蜷川実花展 with EiM : 儚くも煌めく境界 Where Humanity Meets Nature
しらかみのぞきみこう
② 弘前エクステンジ #06 「白神観見考」



- 会期 2024年4月6日(土) - 9月1日(日)
会場 ① 弘前れんが倉庫美術館
② 弘前れんが倉庫美術館、HIROSAKI ORANDO、
ギャラリーまんなか
開館時間 9:00~17:00 (入館は16:30まで)
休み 火曜日 ※ただし4/23(火)・30(火)、8/6(火)は開館
※館外展示の営業時間は各施設に準ずる
参加作家 ① 蜷川実花 with EiM [Eternity in a Moment]
② 狩野哲郎、佐藤朋子、永沢碧衣、L PACK.

蜷川実花《花、瞬く光》2022年 ©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

弘前れんが倉庫美術館では展覧会とリサーチ・プロジェクトを実施します。展覧会「蜷川実花展 with EiM : 儚くも煌めく境界」は、写真家・映画監督の蜷川実花が、データサイエンティストの宮田裕章、セットデザイナーのEnzo、クリエイティブディレクターの桑名功らと結成したクリエイティブチーム・EiMとの協働により実現する大規模な個展です。うつろう時間やながれゆく季節の境界を超える壮大なインスタレーションを発表するほか、蜷川が弘前をはじめ、日本各地で撮影した桜の写真など、人の手とまなざしに育まれた花や木々を捉えた作品群を紹介します。展覧会を通じて、人間と自然とが築いてきた関係性を浮かび上がらせ、それぞれが住まう土地の自然やその背景にある文化、歴史を新たな視点から捉え直す機会となることを目指します。

弘前エクステンジ #06 「白神観見考」は、青森県南西部に位置し、弘前市を含む津軽平野を流れる岩木川の源流の地でもある白神山地をテーマに実施するリサーチ・プロジェクトです。狩野哲郎、佐藤朋子、永沢碧衣、L PACK. の4組のアーティストたちが、それぞれの視点で、作品展示を始め、ワークショップやトークイベントなどを実施します。古くから人々の生活を支えてきた川の源となる山々に目を向け、そこに息づく動植物や人々の営みの時間が積み重なる景色に触れることで、いつもの風景が異なるものに見えるてくるきっかけとなることでしょう。



左) 参考図版 永沢碧衣《村景》2019年 ©かみこあにプロジェクト (秋田)

右) 参考図版 狩野哲郎 《21の特別な要求》2021年 Courtesy of the artist

[メイン企画] 八戸市美術館

エンジョイ！アートファーム！！

会期	2024年4月13日(土) - 9月1日(日)
会場	八戸市美術館 ジャイアントルーム
開館時間	10:00~19:00
休み	火曜日(祝日の場合は翌日) および6/26(水) *ただし4/30(火)、8/13(火)は開館
参加作家	磯島未来、漆畑幸男、しばやまいぬ、蜂屋雄士、東方悠平
会場構成	佐藤慎也



5人のアーティストたち
(左から磯島、東方、漆畑、しばやまいぬ、蜂屋)

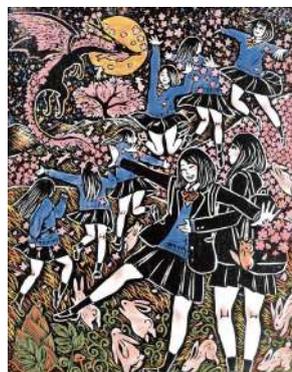
八戸市美術館のコンセプト「出会いと学びのアートファーム」を体現する企画を実施します。展覧会やプロジェクト、コミュニケーションを種として、そこに訪れた人々が得る出会いや学びが栄養となり、それぞれの感性や創造力が育まれる。美術館は、その畑(ファーム)として、多様な活動の土壌となり、まちの未来を創造していきます。そんな美術館を象徴する空間「ジャイアントルーム」で、八戸を拠点に活動する5人のアーティストが、来館者と共につくり、楽しむプロジェクトを展開していきます。作品を鑑賞したり、絵を描いたり、トークプログラムに参加してみたり、ジャイアントルームに滞在するアーティストと交流したり……。絵画や版画、写真、ダンスなど、多様なジャンルで日々繰り広げられる活動により、来館者とアーティストがこの場で出会い、関わり合うことで、まるで畑に蒔いた種のようにどんどん育っていくことを期待しています。

訪れるたびに变化するジャイアントルームのあり方は、訪れる人によって使い方が決められていく「はらっぱ」のような場でもあります。

「はらっぱ」でもあり、「ファーム」でもあるこのジャイアントルームで、様々な作品や活動、そしてアーティストとの出会いをお楽しみいただけます。



東方悠平 《TENGUBUCKS Cafe in Hue - Coffee Float》
2019年



しばやまいぬ 《疾風少女2》
2018年

[メイン企画] 十和田市現代美術館

野良になる



参考図版 丹羽海子 《Metropolis Series: Good Egg Community》2022年
Courtesy the artist and Someday, New York
Photo: Daniel Terna

会期	2024年4月13日(土) - 11月17日(日)
会場	十和田市現代美術館
開館時間	9:00~17:00 (入館は16:30まで)
休み	月曜日(祝日の場合は翌火曜日) ※ただし、4/22(月)、30(火)、5/6(月)、7/15(月)、 29(月)、8/5(月)、13(火)、9/16(月)、23(月)、 10/14(月)、11/4(月)は開館
参加作家	丹羽海子、墓原蓉子、アナイス・カレニン、永田康祐

近年、世界規模で気候変動への危機感が高まり、人間の自然に対する関係を再考することが求められています。しかし現在私たちが知る「人間」のあり方そのものが、自然を管理すべき他者として収奪してきたものであるならば、そのおなじ「人間」が自然を「救う」ことができるのでしょうか。

本展では近代が生み出した自律した理性的な主体としての「人間」を見直し、その成立過程で排除された存在や思考に目を向けます。私たちの思考を規定するさまざまな二項対立的な枠組みの境界を攪乱しつつ強かに——野生でも飼われるのでもなく野良のように——息づくあり方、物語に出会うことになるでしょう。

日本とアメリカにルーツを持ち、トランスジェンダー女性として生きるあり方を彫刻で表現する丹羽海子、10歳の頃に学校教育を離れ、研ぎ澄まされた独学の感性で風景を描く墓原蓉子、品種改良や養殖といった人間のコントロールと動植物の生が交錯する関係を取り上げ、映像や料理の作品を作る永田康祐、ブラジルに植民地時代以前から伝わる知識をもとに、植物と人間の関係性を問い直す作品を制作するアナイス・カレニンなど、多様な視点から自然を捉えるアーティストの表現を紹介します。国内外の若手作家の新作を中心に、彫刻、映像、ウールのタペストリー、サウンド、インスタレーション、食など、多岐にわたる表現形式で現代アートを楽しめる展覧会です。



参考図版 墓原蓉子 《それじゃわからない》2022年 ©Yoko Daihara, courtesy of Take Ninagawa, Tokyo.

参考図版 アナイス・カレニン 《リコマベ》2022年 Photo: 竹久直樹

参考図版 永田康祐 《Purée》2020年

常設展示 |

常設展では、人間と自然をテーマに、ロン・ミュエクや、塩田千春、レアンドロ・エルリッヒなど、世界で活躍するアーティストたちの作品を展示しています。いずれも、展示室や床全体に広がるインスタレーション、作品内部に入ることのできる彫刻など、ここ十和田でしか鑑賞することができない作品ばかりです。さらに美術館向いのアート広場やまちなかにも作品が点在しています。



ロン・ミュエク 《スタンディング・ウーマン》 Courtesy Anthony d'Offay, London Photo: 小山田邦哉

[同時開催]

フェスの期間中に開催される展覧会です。公式ガイドブックに付いている「パスポート」を提示いただくと各展覧会を割引料金で鑑賞できます。

○青森県立美術館

「帝国ホテル二代日本館 100 周年 フランク・ロイド・ライト 世界を結ぶ建築」

会期 2024 年 3 月 20 日(水・祝) - 5 月 12 日(日)
休館日 3/25 (月)、4/8 日(月)、4/15 (月)、4/22 (月)
主催 フランク・ロイド・ライト展青森実行委員会 (青森県立美術館、青森放送、青森県観光国際交流機構)、フランク・ロイド・ライト財団

「鴻池朋子展：メディスン・インフラ」

会期 2024 年 7 月 13 日(土) - 9 月 29 日(日)
休館日 第 2・4 月曜(祝日の場合はその翌日)
主催 鴻池朋子展実行委員会 (青森県立美術館、青森朝日放送、青森県観光国際交流機構)

○八戸市美術館

「展示室の冒険」

会期 2024 年 4 月 20 日(土) - 6 月 24 日(月)
主催 八戸市美術館

「tupera tupera のかおてん。」

会期 2024 年 7 月 6 日(土) - 9 月 1 日(日)
主催 青森朝日放送

「コレクションラボ 007 大久保景造と八戸文化」

会期 2024 年 3 月 23 日(土) - 7 月 8 日(月)
主催 八戸市美術館

「コレクションラボ 008 彩る書」

会期 2024 年 7 月 13 日(土) - 10 月 28 日(月)
主催 八戸市美術館

○十和田市現代美術館

「尾角典子展」

会期 2024 年 7 月 6 日(土) - 9 月 8 日(日)
会場 space (十和田市西三番町 18-20)
主催 十和田市現代美術館

各美術館について

青森県立美術館

| 建築家：青木淳

隣接する三内丸山遺跡の発掘現場から着想を得た、トレンチ（壕）とホワイトキューブからなる建築が独創的です。シャガールのバレエ「アレコ」舞台背景画のほか、奈良美智、棟方志功、成田亨など郷土作家の作品を展示。日本画や洋画、現代アートまで幅広いコレクションと演劇・音楽など舞台芸術への取り組みにより、豊かな芸術の魅力を発信しています。

→<https://www.aomori-museum.jp/>

青森公立大学 国際芸術センター青森

| 建築家：安藤忠雄

周囲の豊かな自然環境を生かし、建物を森に埋没させる「見えない建築」をテーマとした建築が特徴的です。アーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）を中心に、ジャンルに捕らわれない展覧会、トーク、ワークショップなどを開催しています。春から秋にかけては敷地内の森の散策や、20数点を数える野外彫刻の鑑賞も楽しむことができます。

→<https://acac-aomori.jp/>

弘前れんが倉庫美術館

| 建築家：田根剛

約100年前に酒造工場として建てられた煉瓦造の建物を改修した美術館です。「記憶の継承」をコンセプトに、建物本来の姿を残してリノベーションを行いました。建築や地域に根差したコミッション・ワークを重視し、奈良美智、ジャン＝ミシェル・オトニエルの作品をはじめ弘前ならではのコレクションを形成。黒いコルタールの展示壁など空間の特性を生かした現代アートの展覧会を開催しています。

→<https://www.hirosaki-moca.jp/>

八戸市美術館

| 建築家：西澤徹夫、浅子佳英、森純平

様々な活動を支える巨大な空間「ジャイアントルーム」を取り囲むように、展示室などの専門性の高い個室群が配置されています。〈種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館～出会いと学びのアートファーム～〉をテーマとし、八戸の美や文化を伝える収蔵作品を様々な切り口で紹介する展示や、幅広いジャンルの企画展、プロジェクトを展開しています。

→<https://hachinohe-art-museum.jp/>

十和田市現代美術館

| 建築家：西沢立衛

人間と自然をテーマに、草間彌生、奈良美智、ロン・ミュエクなど世界で活躍するアーティストらの作品を常設展示しています。展示室1部屋に1作品を展示することで、作品の中に入り込むような鑑賞体験ができます。大小様々な展示室がガラスの通路でつながれており、アートの家を訪ね歩くような構造が特徴的です。館内だけではなく、周辺のアート広場や商店街にも作品が点在し、まち全体でアートを楽しむことができます。

→<https://towadaartcenter.com/>



©Naoya Hatakeyama

©Daici Ano



[メイン企画] 参加作家

青森県立美術館 「かさなりとまじわり」

▼館内各所 ———りんご箱を活用した装置を設置

青木 淳 | AOKI Jun



1956年神奈川県生まれ。東京大学工学部建築学修士修了。磯崎新アトリエ勤務を経て、1991年に独立し、青木淳建築計画事務所（現在はASに改組）を設立。主な作品に、遊水館、潟博物館（1997年）、Louis Vuitton Omotesando（2002年）、青森県立美術館（2006年）、京都市美術館リニューアル（西澤徹夫との協働、2019年）など。主な著書に『JUN AOKI COMPLETE WORKS』（1・2・3巻 / LIXL出版）、『原っぱと遊園地』（1・2巻 / 王国社）など。2004年に芸術選奨文部科学大臣新人賞、2020年に毎日芸術賞を受賞。2019年4月より東京藝術大学美術学部建築科教授（2024年3月まで）。現在、京都市美術館（通称：京都市京セラ美術館）館長も務めている。

▼エントランスギャラリー ———「かさなりとつらなり」というテーマを象徴する作品を展示

井田 大介 | IDA Daisuke



1987年鳥取県生まれ。2015年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。彫刻という表現形式を問いながら、彫刻・映像・3DCGなど多様なメディアを用いて、目には見えない現代の社会の構造やそこで生きる人々の意識や欲望を視覚化している。2016年からは、世界中の人々がインターネット上にアップロードしている匿名的な画像を素材として、インターネット以降のモノや身体のあり方を彫刻する「Photo Sculpture」を継続的に制作している。

▼コミュニティギャラリーエリア ———世界的に活躍した2人の作家の青森との関連性をベースに、時間と空間の「かさなり」と「まじわり」のインスタレーションを構築

原口 典之 | HARAGUCHI Noriyuki



1946年神奈川県生まれ。1970年、日本大学芸術学部美術学科卒業（油画専攻）。主な展覧会に、「ドクメンタ6」（カッセル、ドイツ、1977年）、「NORIYUKI HARAGUCHI」（レンパッハハウス市立美術館、ミュンヘン、2001年）、「黒の方形-マレーピッチへのオマージュ」（ハンブルガークンストハーレ、ハンブルグ、2007年）、「社会と物質」（バンクアートスタジオ NYK、2009年）、「TOKYO 1955-1970: 新しい前衛」（ニューヨーク近代美術館、2012年）2020年、死去。

吉田 克朗 | YOSHIDA Katsuro



Photo : 馬場直樹

1943年埼玉県生まれ。1968年、多摩美術大学絵画科卒業。1968年から70年代にかけて、「もの派」の中心作家として《Cut-off》シリーズをはじめとする物性の強い立体作品を制作。1970年に第1回ソウル国際版画ビエンナーレで大賞受賞。1973年、文化庁海外芸術研究生として渡英。主なグループ展に、「前衛芸術の日本展」に出品（ポンピドゥーセンター/パリ、1986年）、「今日の作家たちIV 山本正道・吉田克朗」（神奈川県近代美術館、1992年）など。1969年から風景や人物のスナップ写真を使ったシルクスクリーン（後にフォトエッチング）による版画の制作を始め、1992年に三戸町立現代版画研究所（現・三戸町立版画工房）の設立にも尽力した。1999年、死去。

吉田 築子 | YOSHIDA Noriko



1944年東京都生まれ。父は弘前市出身の作家、今日出海（1903-1984）。1967年、多摩美術大学油絵科卒業。1968年に初個展開催（村松画廊、東京）。1971年に吉田克朗と結婚。1999 グループ展（坂倉準三メモリアル・ギャラリー・東京）以後毎年12月に開催 2003年にFrans Masereel Centrum, Bergiumにてレジデンス（リトグラフ制作）。主なグループ展に、「芸術家の妻たち」（カサヤの森現代美術館/横須賀、2005年）、「Inde House ころみの展覧会」（Inde House 印出邸/茨城県古河、2005年）、2006年に青森市で個展「吉田築子の世界」（西衛器オープンスペース ゼフィルス）を開催した。2018年、死去。

大森 裕美子 | OHMORI Yumiko



東京都生まれ。1990年、東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。出会った物質に対する自身のまなざしの在り方を考察してゆく姿勢で、さまざまな素材による立体、ドローイング、写真、テキストワークなどによるインスタレーションや郵送作品を展開している。主な展覧会に、「展翅考」（ギャラリー現、1989年）、「21世紀・的 空間—現代美術と民俗の空間の出会い」（セゾン美術館、1994年）、「美術と博物展—自然の形態と神秘」（福井県立美術館、1994年）、「美術家の冒険—多面化する表現と手法」（国立国際美術館、1996年）、「現代アートが開く「私」の世界 水晶の塔をさがして」（福岡市美術館、2000年）、「WORK SHOP いいものいいこと」（東京都現代美術館、2006年）、「自然と幻想の博物誌」（豊橋市美術博物館、2012年）、「коллажи и рисование」（サイギャラリー、2022年）などがある。

大森 記詩 | OHMORI Kishi



1990年東京都生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科 美術専攻 彫刻研究領域博士後期課程 修了。金属鋼材など断片性を有する素材に着目しながら、物体や事象のスケール感に対するルーツ、社会的な変性をテーマにした彫刻作品を制作。また、制作と並行しながら模型誌メディアで連載を担当するなどシームレスに活動している。主な個展に、「OVERHEADYARD」（金澤水銀窟/ギャラリー 小暮、2022年）、「MIXINGSCAPE」（ギャラリーHIROUMI、2023年）、「DENATURE」（ギャラリー小暮、2023年）など。主なグループ展に、「ラブラブショー2」（青森県立美術館、2017年）、「生誕100年 | ロボットと芸術 ~越境するヒュー マノイド~」（苫小牧市美術博物館、2020年）、「Public Device - 彫刻の象徴性と 恒久性」（東京芸術大学美術館 陳列館、2020年）、「青秀祐 × 大森記詩 ARMORY SHOW - SITE A : Damage Control」（青森県立美術館、2023年）などがある。

吉田 有紀 | YOSHIDA Yuki



1971年、神奈川県生まれ。1997年、多摩美術大学大学院美術研究科修了。日常品やキャラクターに使用される色彩を抽象形態に置き換えて平面、オブジェを制作し、その増幅、反復をとおして「抽象の見え方の意味」の思考実験を行っている。2000年、第11回五島記念文化賞美術新人賞受賞（研修先ロンドン UCL Slade School of Fine Art）。eitoeiko（2010年、2013年、2015年、2020年）、カサヤの森現代美術館（2010年）、Fei artmuseum Yokohama（2020年）などで個展を開催。「MOT アニュアル No Boder—「日本画」から／「日本画」へ」（東京都現代美術館、2006年）への参加や、パレスホテル東京、星のやりゾート、ヒルトン横浜、丸の内ホテルなどのパブリックアートも多数手がけている。

青 秀祐 | AO Syusuke



1981年茨城県生まれ。2004年多摩美術大学美術学部絵画学科日本画専攻卒業。元自衛官パイロットを父に持ち、幼少の頃より飛行機への憧れを抱く。「PAX-4」展（2010年）より、戦闘機をモチーフとした様々なインスタレーションを展開している。主な個展に、「TRIAL」（航空科学博物館/千葉、2011年）、「マルチロール・ファイター」（eitoeiko/東京、2011年）、主なグループ展に「Gateway Japan」（トランス市美術館/カリフォルニア州トランス、2011年）、「Art and Air」（青森県立美術館、2012年）、「プレイヤーズ遊びからはじまるアート」（アーツ前橋、2014年）、「META real」（神奈川県民ホールギャラリー、2016年）、「富野由悠季の世界」（青森県立美術館、2021年）などがある。

▼コミュニティホール ———「ミュージアムに来た体験が展覧会になる」というテーマのメディアアートを設置
バーチャリオン | Viirtualion



バーチャリオンは、コロナ禍の只中に、大阪大学の大学院生であった五十里翔吾が、自身が所属していた美術部の展覧会をオンライン開催するために開発した技術を基に設立したユニットである。本草学者・キュレーターの伊藤謙、デジタルクローンの生みの親である米倉豪志がジョインしている。バーチャル空間でアートを美しく見せる技術を追求するとともに、「AIによるミュージアムの自動生成」というプロジェクトにも取り組んでおり、10万館の自動生成を達成している (<https://virtualion.com/>)。今回のプロジェクトではこの技術を「ミュージアムに来た体験が展覧会になる」というテーマへと展開させていく。

▼ワークショップエリア ———青森県ゆかりの若手作家のリレー個展+ワークショップを開催
吉田 謙也 | YOSHIDA Kenya



1994年青森県生まれ。2017年、多摩美術大学工芸学科ガラスコース卒業。2019年、富山ガラス造形研究所研究科卒業。2019年、Corning museum of glassで3ヶ月のインターンシップ。2022年、多摩美術大学非常勤嘱託。2024年、東京藝術大学大学院修士課程工芸学科ガラス造形研究室修了。個展に、「ガラス/光/影」（Gally DiEGO、2023年）、「実状の引用」（新宿高島屋、2023年）、グループ展として、「そのごの美術科」（協同組合タッケン美術展示館、2022年）、「素材から始まる地球の循環」（Samsung 表参道、2023年）などがある。2021-2023年、「東京アートフェア」へ出品。

室谷 心太郎 | MUROYA Shintaro



1987年青森県生まれ。2010年、東北芸術工科大学情報デザイン学科映像コース卒業。2011年映画「毎日かあさん」（小林聖太郎監督）に制作進行として参加。株式会社共同テレビジョン勤務を経て、人の心を見つめつづける映像作家として2013年「こちら宇宙郵便局第三集配エリア営業所」（NHK 総合、信州須坂蔵の町映画祭）、「平成アキレス男女」（国際芸術祭あいちトリエンナーレ 2013 映像プログラム）、2015年「劇場版・復讐のドミノマスク」（MOOSIC LABO 2015、ちば映画祭、ほか全国映画館）を制作。「撃鉄」や「アカシック」、「神聖かまってちゃん」や「バンドじゃないもん！」などバンド、アイドルのMVを手がける。新木場1stRINGにてDDTプロレスのヤス・ウラノと対戦、5分36秒反則負け。2023年「メル・ギブソンス」加入。

柳谷 航野 | YANAGIYA Kouya



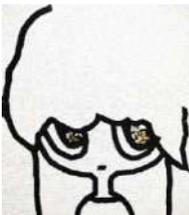
1995年、青森県生まれ。2017年、東北芸術工科大学芸術学部美術科彫刻コース卒業。「夢に出てきた動物」や「小さい頃のトラウマ」、「散歩中に出会った動物や建築物」など自らの日常をテーマに作品を制作している。個展に、「TUAD ART LINKS 2019 柳谷航野展」(銀座 K's Gallery、2019年)、「青二七才展」(gallery CRADLE/青森市、2022年)、グループ展に「あかりのありか 18th」(ギャラリー NOVITA/青森市、2021年～以降毎年参加)、「ACAC 写真部 -それぞれの日常から-」(青森市役所駅前庁舎1階駅前スクエア、2022年)、「UNUN 大人の文化祭」(HIROSAKI ORANDO/弘前市、2023年)などがある。

糸虫 | ITOMUSHI



1989年、青森県生まれ。2010年、奈良芸術短期大学美術科日本画コース卒業。日本画と漫画をベースにした作品をSNSなどで発表している。近年は虫をモチーフとし、自然や人間との関係性をテーマにした作品を手がけている。2019年より青森戸山高校美術科有志展「そのごの美術科」参加。

Nakaya



青森県生まれ。東北芸術工科大学卒業。様々な素材を用いて、眠っている動物をモチーフにした絵やレリーフ、立体作品を多く手がけている。青森戸山高校美術科有志展「そのごの美術科」に2022年、2023年出品。「一日限りの画廊めばえ-mebae-」(2022年)にも参加。

豊川 茅 | TOYOKAWA Chie



1990年、青森県生まれ。青森県立青森戸山高校美術科にて美術・グラフィックデザインを学び、2009年の卒業後は洋裁を学ぶ。2016年にトヨカワイラスト研究室を立ち上げ、「なんとなくハッピー」をテーマに、青森を拠点に県内外のイラストとデザインを手がける。近年の主な作品に、「青森県魅力発信アート りんごのたび」(CL:JR 東日本、AD:トヨカワイラスト研究室、D:トヨカワイラスト研究室、I:トヨカワイラスト研究室/2022年)、「青森市マイナンバーカード PR ラッピングバス&ラッピングカー」(CL:青森市、AD:トヨカワイラスト研究室、D:トヨカワイラスト研究室、I:トヨカワイラスト研究室/2023年)などがある。縄文と郷土玩具と温泉の愛好家。2023年からは前向きじゃないものづくりユニット「つらいデザイン」をスタートし、ハッピーと前向きじゃない2本立てで制作中。

窪田 梨絵 | KUBOTA Rie



1987年、青森県生まれ。2010年、東北芸術工科大学卒業。「私はいつも怒っています。怒りの対象は、よくないモノやコトが当たり前のように存在する世の中に対して、変わろうとしない世の中に対してです。作品はいつも怒りから生まれています。」という意識のもとに作品の制作を行なっている。2017年より青森戸山高校美術科有志展「そのごの美術科」に参加。主なグループ展に「柳之森 selection2019展」(2019年)、「Case By Show Case 表皮の内側/内在タブロー」(2020年)、「一日限りの画廊めばえ-mebae-」(リンクステーションホール/青森市、2022年)などがある。2008年、「チャイルドライン新キャラクター公募」優秀賞受賞。

算用子 綺香 | SANYOUSHI Ayaka



1994年青森県生まれ。2013年、青森県立青森戸山高校美術科卒業。青森に育った色彩感覚を反映した心象風景を手がけている。2018年に初個展(miageru./青森)。その他個展に、「うみいろ」(ギャラリークレイドル/青森市、2021年)、「森の手紙」(ギャラリークレイドル/青森市、2022年)。2016年より青森戸山高校美術科有志展「そのごの美術科」に参加。

宮野 春香 | MIYANO Haruka



1987年、青森県生まれ。2010年、東北芸術工科大学芸術学部美術科洋画コース卒業。頭部が「たべもの」になった人物像によって人それぞれの「個性」を浮かび上がらせ、それぞれの「価値」を共有するきっかけとして作用する作品を手がけている。個展に「宮野春香展 たべものあたま」(青森・空間実験室、2009年)、グループ展に、「IWAKI ART トリエンナーレ 2010 やる気」(gallery & cafe blautrot、2010年)、「ART POINT Selection II」(GALLERY ART POINT、2011年)、「Reflections」(GALLERY ART POINT、2011年)、アートで音楽のあるまちづくり「A-Paradise」(BLACK BOX、2017年)、青森戸山高校美術科有志展「そのごの7組」(2014~2015年)、青森戸山高校美術科有志展「そのごの美術科」などがある。

青森公立大学 国際芸術センター青森

「currents / undercurrents -いま、めくるめく流れは出会って」

青野 文昭 | AONO Fumiaki

1968年宮城県仙台市生まれ、在住。「修復」をテーマとし、空き地や海岸などで拾った廃棄物を、その欠損部分や使われた痕跡を手がかりに「なおす」方法を用いて作品を制作している。

ジュマナ・エミル・アブード | Jumana Emil ABOUND

1971年イスラエルのシェファ・アムル生まれ、イェルサレムとロンドン拠点。様々な表現方法を用いて、パレスチナや抑圧された文化圏におけるストーリーテリング、水、先住民の権利を扱う。

岩根 愛 | IWANE Ai

東京都出身、同地と福島県三春町拠点。カリフォルニアのペトロリアハイスクールに学ぶ。1996年より写真家として活動し、移民を通じたハワイと福島の関わりなど、土地に根ざした人間の姿を追う。

是恒 さくら | KORETSUNE Sakura

1986年生まれ、広島県呉市出身。アラスカ先住民の狩猟生活やものづくりにはじまり、現在は捕鯨、漁労、海の民俗文化についてフィールドワークと採話を行い、リトルプレスや刺繍、造形作品として発表する。

工藤 省治 | KODO Shoji

1934年青森市生まれ、岩手県水沢育ち。1957年から愛媛県の梅山窯に陶工として働き、砥部焼の代名詞ともいえる唐草模様を生み出す。1974年春秋窯設立。2019年没。

光岡 幸一 | MITSUOKA Koichi

1990年愛知県生まれ、東京拠点。建築的な思考をベースに遊びの要素を取り入れつつ制作。都市やコミュニティと対話し、自らもそこに介入して得た経験を作品化している。

中嶋 幸治 | NAKAJIMA Koji

1982年青森県平川市（旧平賀町）生まれ、在住。札幌拠点を経て、現在は美術家／介護者／りんご農園手伝いとして、作品制作を通じ、万物の多様な位相の移動や痕跡に触れ、留めようとする。

澤田 教一 | SAWADA Kyoichi

1936年青森市生まれ、報道写真家として活躍。ベトナム戦争を撮影した《安全への逃避》でハーグ第9回世界報道写真大賞、1966年ピューリッツァー賞。1970年カンボジア取材中、銃撃に襲われ死亡。

鈴木 正治 | SUZUKI Masaharu

1919年青森市生まれ、第二次世界大戦時の中国戦線での従軍経験から彫刻家になることを決意。平和を願う心とユーモアにあふれた絵や彫刻を残す。2008年没。

ジャスミン・トーゴ=ブリスビー | Jasmine TOGO-BRISBY

1982年オーストラリアのクイーンズランド州生まれ。祖先是バヌアツから連れ去られ、オーストラリアのサトウキビ農園で働かされた。太平洋奴隷貿易の歴史と現代への影響について作品制作を通して検証している。

ロビン・ホワイト | Robin WHITE

1946年ニュージーランドのテ・プケ生まれ、地域主義的な絵画を描いたのち、1982年から17年間キリバス共和国に滞在。島での伝統的な共同制作を通してアート概念を拡張し、女性たちとの協働を通して作品を制作する。

[後期のみ] アイヌの衣服（青森市教育委員会所蔵）

[会場構成]

山川 陸 | YAMAKAWA Rick

1990年生まれ、建築家、アーティストとして活動。土地と人の折り合いの歴史から都市を見直すツアーパフォーマンスなど、様々な形式により、集団で共に考える状況の設計に取り組む。

弘前れんが倉庫美術館

① 蜷川実花展 with EiM : ^{はかな} 儚くも ^{きら} 煌めく境界 Where Humanity Meets Nature

蜷川 実花 | NINAGAWA Mika



写真家、映画監督。写真を中心として、映画、映像、空間インスタレーションも多く手掛ける。クリエイティブチーム「EiM: Eternity in a Moment」の一員としても活動している。木村伊兵衛写真賞ほか数々受賞。2010年 Rizzoli N.Y.から写真集を出版。

『ヘルタースケルター』（2012年）、『Diner ダイナー』（2019年）はじめ長編映画を5作、Netflix オリジナルドラマ『FOLLOWERS』を監督。最新写真集に『花、瞬く光』。

主な個展に、「蜷川実花展」（台北現代美術館、2016年）、「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」（日本の美術館を巡回、2018年-2021年）、「MIKA NINAGAWA INTO FICTION / REALITY」（北京時代美術館、2022年）、「蜷川実花 瞬く光の庭」（東京都庭園美術館、2022年）などがある。

Eternity in a Moment [EiM]

写真家・映画監督の蜷川実花と、データサイエンティストの宮田裕章（みやたひろあき）、セットデザイナーのEnzo（エンゾ）、クリエイティブディレクターの桑名功（くわないさお）らで結成されたクリエイティブチーム。プロジェクトごとに多様なチームを編成しながら活動する。主な作品発表に、「胡蝶の旅 Embracing Lights」（安比 Art Project、2022年）、蜷川実花「残照 / Eternity in a Moment」（小山登美夫ギャラリー前橋、2023年）、「蜷川実花展 Eternity in a Moment 瞬きの中の永遠」（TOKYO NODE、2023年）など。

②弘前エクステンジ#06 しらかみのぞきみこう「白神覗見考」

狩野 哲郎 | KANO Tetsuro



Photo : Takashi Arai

1980年宮城県生まれ。神奈川県在住。2007年東京造形大学大学院造形研究科修了。2011年狩猟免許(わな・網猟)取得。生物から見た世界/狩猟/漁業/測量などを軸として国内外でリサーチ/滞在制作を行う。美術館のライブラリースペースや街中各所に作品を展示し、白神山地が世界自然遺産となったことで人や動物にどんな変化が生まれたのか、青森のさまざまな自然や文化との交流を通じて探る。

佐藤 朋子 | SATO Tomoko



Photo : 大野隆介

1990年長野県生まれ。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーの形式を用いた「語り」の芸術実践を行っている。「山村の近代化・人の営み・歴史」をキーワードに、弘前を訪れ、リサーチの成果を随時公開。

永沢 碧衣 | NAGASAWA Aoi



1994年秋田県横手市生まれ。2017年秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻卒業。秋田に在住しながら狩猟免許(第一種銃猟、わな)を取得し、東北の狩猟・マタギ文化に関わりながら“生命の根源”を辿り、“人と生物と自然”の関係性を問う絵画作品を制作している。「山の命・山の狩猟」をキーワードに、釣りや狩猟といった、作家の実体験に基づいて制作された絵画作品の展示と、自身の生活と密接な関係にある制作の様子を紹介するトークイベントを実施。

L PACK.



Photo : Koichi Tanoue

小田桐奨と中嶋哲矢によるユニット。共に1984年生まれ、静岡文化芸術大学空間造形学科卒。アート、デザイン、建築、民藝などの思考や技術を横断しながら、最小限の道具と現地の素材を臨機応変に組み合わせた「コーヒーのある風景」をきっかけに、まちの要素の一部となることを目指す。喫茶店が多く点在し洋風の文化が根付く弘前で、コーヒーにまつわるイベントを、様々なアーティストと開催予定。

八戸市美術館 「エンジョイ！アートファーム !!」

磯島 未来 | ISOJIMA Miki



八戸市出身・在住。振付家・ダンサー。幼少よりモダンダンスを習う。上京後「黒沢美香&ダンサーズ」「ピンク」として国内外で踊り、個人では全国舞踊コンクール上位入賞。日本女子体育大学・舞踊学専攻卒業。05年度文化庁国内研修員、08年度文化庁在外研修員として2年間ベルリンに滞在。帰国後、自身が構成・演出を担う「未来.Co」を立ち上げて作品を上演、美術家・音楽家などとも共同作業を展開する他、子どもから大人までダンス経験を問わないワークショップも行う。震災後、三陸の郷土芸能に出会い2018年より金津流浦浜獅子躍（岩手県大船渡市）躍り手。

漆畑 幸男 | URUSHIHATA Yukio



1948年生まれ。十和田市出身、八戸市在住。画家。馬小屋のある旧家で馬や牛とともに暮らす幼少時代を経て、北里大学畜産学部獣医学科へ進学。青森県職員の獣医師として、家畜保健衛生所などに勤務する。35歳より絵画制作を開始し、幼少期から親しんだ馬や牛をモチーフとした、物語性のある具象画を描く。第84回東光展（2018年）30号会友奨励賞。第81回河北展（2018年）菅野廉賞を皮切りに、仙台市長賞（2019年）、青森県知事賞（2022年）、文部科学大臣賞（2023年）を受賞。日展入選（2020年～2023年）。八戸市文化協会芸術文化褒賞（2020）、八戸市文化賞（2021年）。東光会会員。

しばやまいぬ | SHIBAYAMAINU



少女板画家・イラストレーター。八戸市生まれ。幻想的な世界観で女子高生を主題とした木板画を創作。大学時代からイラストレーターを志し、型にはまらない表現を模索。10年前から「死ぬまで女子高生の絵を描き続けたい」と思うようになり、棟方志功や坂本小九郎監修の教育版画「虹の上をとぶ船」に感動し、独学で木板画の創作を開始。過去の個展に「疾風少女板画展」（十和田倶楽部、十和田市、2018年）、「疾風少女板画展2」（八通ギャラリー、八戸市、2018年）、「冬の疾風少女展」（八戸ポータルミュージアムはっち、八戸市、2018年）などがある。

蜂屋 雄士 | HACHIYA Yuji



1981年仙台市生まれ、八戸市在住。写真家。ウェブデザイナーや写真館勤務などを経て、2013年フリーランスのフォトグラファーに転身。地元八戸を中心にフィルムで人々の写真を残す「はちや写真館」を開催。10年以上にわたり夫婦で外出する際に撮影してきた「#僕と妻の定点写真」としてが人気を集める。個展として、「いっしょにつくるはちや写真館」（東北のしごと／GALLERY WAA、十和田市、2020年）、「はちや写真館 これまでとこれからと、」（八戸市美術館、八戸市、2023年）。南郷アートプロジェクトなど市内のアートプロジェクトなどの記録撮影にも携わる。

東方 悠平 | HIGASHIKATA Yuhei



1982年生まれ、札幌市出身。2017年より八戸市在住。芸術実践における「遊び」を手がかりに、立体作品やインスタレーション、参加型のプロジェクトやワークショップなどを行う。2008年に筑波大学大学院芸術研究科総合造形領域修了、2023年には東京藝術大学大学院映像研究科博士後期課程を修了。2021年に文化庁の新進芸術家海外研修制度1年研修員としてベトナムに滞在し、リサーチや展覧会を行う。八戸市にフィリピンなどからアーティストを招へいしてアーティスト・イン・レジデンスを行うAIR-H(2017～)を主宰し、アートと地域との関わり方を探っている。

十和田市現代美術館 「野良になる」

丹羽 海子 | Umico NIWA



©Umico Niwa, 2022,
Photo : Colin Conces

1991年愛知県生まれ、アメリカを拠点に活動。西洋的な主体概念を否定し、身体やジェンダーに拘束されないオルタナティブな主体のあり方を彫刻を通して探究している。萎れた花や、熟したフルーツといった有機的な素材を用いて、儚く移ろいやすい存在を表現する。主な個展に「靴の中の暮らし（幻影コオロギ）」（Fig.、東京、2023年）、「The Quantified Elf (and how it came to love itself)」（Someday Gallery、ニューヨーク、アメリカ、2022年）、グループ展に「The Invention of Nature」（Nino Mier Gallery、ロサンゼルス、アメリカ、2023年）、「もうすぐ春ですね」（XYZ Collective、東京、2022年）など。

葦原 蓉子 | Yoko DAIHARA



©Yoko Daihara, courtesy of
Take Ninagawa, Tokyo.

1989年千葉県生まれ、東京都を拠点に活動。デジタルとアナログの重なりに関心を持ち、iPad上で構成したイメージを、ウールを用いたテキスタイルへと変換して制作している。日常で出会う植物や風景など様々なモチーフを紡ぎ合わせ、カラフルで空想的な心象風景を描く。主な個展に「project N 88 葦原蓉子」（東京オペラシティアートギャラリー、2022年）、「食べてください食べないでください」（Take Ninagawa、東京、2022年）など。美術家の冨樫達彦、渡邊庸平とともにアーティストランスペース兼食堂であるLavender Opener Chair／灯明を運営。

アナイス・カレニン | Anais-karenin



Photo : 加藤甫

1993年ブラジル、サンパウロ生まれ、近年は日本を拠点に活動。ブラジルに植民地時代以前から伝わる、薬効を持つ植物に関する知識体系を研究し、植物との親密な関わりを通して植物と人間との関係性を問い直している。アニミズムや神話、植民地主義の歴史、言語、科学など、分野を横断してリサーチを行い、香りやサウンドといった五感に訴える表現方法で作品を制作している。主な個展に「Things named [things]」（The 5th Floor、東京、2023年）、「Mediate Plants」（工房 親、東京、2023年）など。サン・パウロ大学博士研究員、早稲田大学客員研究員及びティーチングアシスタント。

永田 康祐 | NAGATA Kosuke



1990年愛知県生まれ、神奈川県を拠点に活動。自己と他者、自然と文化、身体と環境といった近代的な思考を支える二項対立、またそこに潜む曖昧さに関心を持ち、写真や映像、インスタレーションなどを制作している。近年は、食料生産における動植物の生の管理といった問題についてビデオエッセイやコース料理形式のパフォーマンスを発表している。主な個展に「イート」（gallery αM、東京、2020年）、グループ展に「見るは触れる 日本の新進作家 vol.19」（東京都写真美術館、2022年）、あいちトリエンナーレ（愛知県美術館、2019年）など。

エリア紹介 1 | 青森県について



青 | 青森県立美術館



A | 青森公立大学 国際芸術センター青森



十 | 十和田市現代美術館



弘 | 弘前れんが倉庫美術館

©Naoya Hatakeyama



八 | 八戸市美術館

©Daici Ano

青森県は本州の最北端にあり、突き出た津軽半島とそれに対峙するように北に伸びたマサカリ形の下北半島という特徴的な地形です。西に日本海、北に津軽海峡、東に太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は約 800km に及んでいます。歴史・風土的に津軽、南部、下北と大きく3つに分けられています。

その昔、青森県を含む東北は陸奥国（むつのくに）と呼ばれており、当時の幕府から見て”陸の奥”とされていました。しかし近年、発掘された青森市に所在する三内丸山遺跡の全容が次第に明らかになるにつれ、縄文時代には日本でも有数の文化が発達していたことが判明。世界遺産や文化財に登録された遺跡群も多く、長い歴史を持つ土地でもあります。

AOMORI GOKAN アートフェス 2024 が開催される 4 月から 8 月の間は、青森は最も活気がある季節を迎えます。桜が一斉に咲き始める頃には各地でさくら祭りが行われます。桜のあとは畑にはリンゴの花が開き、夏祭りのシーズンを迎えると神社行列や山車、虎舞、神楽などで華やか「八戸三社大祭」、七夕の灯籠流しの変形であろうといわれる「青森ねぶた祭」。そして津軽の夏を彩る「弘前ねぶたまつり」など、国内外から多くの人が訪れ賑わいをみせます。

エリア紹介2 | 青森市 弘前市 八戸市 十和田市

5つの美術館・アートセンターがある4つの市は、いずれも豊かな文化と自然に恵まれ、それぞれの場所に伝わる祭りや暮らしの手仕事、食など独自の魅力に溢れています。アート体験と共に、地域の新たな魅力を再発見いただく機会となります。

青森市



ねぶたの家W・ラッセ(外観)

青森市は、青森県のほぼ中央に位置する県庁所在地で、北東北における交通・行政・経済・文化の拠点都市です。江戸時代より本州と北海道を繋ぐ交通と物流の要衝として発展したまちで、旅の玄関口となる新幹線新青森駅、青森空港、青森港、東北自動車道などを有する陸・海・空の交通結節点として高い拠点機能を有しています。穏やかな陸奥湾と八甲田連峰の雄大な山々に囲まれている青森市は、四季折々の景観、りんご、カシス、ホタテやナマコなどの豊富な食材に恵まれています。また、日本を代表する火祭りの「青森ねぶた祭」や世界遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」を代表する特別史跡「三内丸山遺跡」、国指定史跡「小牧野遺跡」などの貴重な文化や歴史にも触れることができる魅力的な観光資源を多く有しています。

弘前市



弘前城、岩木山と桜

弘前市は、青森県の南西部に位置する、弘前藩の城下町として発展したまちです。市内には関東以北唯一の現存天守である「弘前城」をはじめ、寺院街や武家屋敷など藩政時代の趣を残す街並み、明治・大正期の洋風建築、日本のモダニズム建築を代表する建築家「前川國男」の近代建築など、歴史的な建造物が数多く残っています。また平成30年に100周年を迎えた「弘前さくらまつり」や、重要無形民俗文化財に指定されている「弘前ねぶたまつり」、その他にも「弘前城菊と紅葉まつり」、「弘前城雪燈籠まつり」と、季節ごとに開催されるまつりには、毎年多くの観光客が訪れています。農業も盛んで、特にりんごの生産量は日本一を誇ります。その他、「津軽塗」「こぎん刺し」「津軽打刃物」など藩政時代より受け継がれてきた伝統工芸品も多く、平成29年には「津軽塗」の漆器製作技術が青森県で初めて国重要無形文化財に指定されています。

八戸市



八戸三社大祭

八戸市は、太平洋を一望できる青森県の南東部に位置し、全国屈指の水産都市、北東北有数の工業都市として発展を遂げてきました。また、古くから市民の文化芸術活動が盛んで、歴史・文化、アート、音楽など多彩な活動が繰り広げられています。市街地からほど近い場所に位置する「種差海岸」は、太平洋に広がる大海原や砂浜、波打ち際まで広がる天然芝生地などの風光明媚な景観が見どころです。豊かな海と冷涼な気候が生んだ八戸の食文化は、「八戸前沖さば」をはじめ、日本一の水揚げを誇るイカ、〈B-1グランプリ〉でゴールドグランプリに輝いた「八戸せんべい汁」など、食の魅力が満載です。ユネスコ無形文化遺産「八戸三社大祭」や国重要無形民俗文化財「八戸えんぶり」、世界遺産登録の「是川石器時代遺跡」といった歴史や文化など、豊富な資源にあふれています。

十和田市



奥入瀬溪流 阿修羅の流れ周辺

十和田市は、青森県の県南地方内陸部に位置し、青森市・弘前市・八戸市からもアクセスができるほか、秋田県や岩手県からアクセスも便利な場所にあります。国立公園である「十和田八幡平国立公園」をはじめ、国の特別名勝及び天然記念物に指定されている「十和田湖」および「奥入瀬溪流」などの大自然があり、春夏秋冬の自然を間近に体感でき、毎年国内外から多くの観光客が訪れています。市街地には、日本の道・100選に選ばれた官庁街通りがあり、通り沿いには、国内外で活躍するアーティストの作品を多数展示しています。また、疎水百選にも選ばれた人工河川の「稻生川」が、十和田市東部の「三本木原台地」を東西に流れて、地域に豊かな実りをもたらしています。